

そうすればこゝに大朝といふのは晋を指したものであり、この畫は晋代に于闐王李聖天の佛洞供養に關して書かれたものであると見て誤らないであらう。(口繪第十圖参照)

此等各時代に亘る佛洞の中、谷の中央部の群が最も古い時代に屬するものであることは、既にペリオ氏が敦煌千佛洞圖録の前序に述べて居る通りで、最も北部に當る群が、元の時代の造營に係り、これには壁畫も存しないとのことである。

一體此の佛洞の存する鳴沙山といふのは、敦煌錄に「鳴沙山去州十五里、其山東西八十里、南北四十里、高處五百尺、悉純沙聚起、此山神異、峰如削成、其間有井、沙不能蔽、盛夏自鳴、人馬踐之、聲振數十里、風俗、端午之日、城中士女、皆躋高峰、一齊蹙下、其沙聲吼如雷、至曉看之、峭嶒如舊、古號鳴沙神沙而祠焉」と見ゆ、その後の諸書にもほゞ同様の記事があり、現代この地を訪ふた人々によつても實證せらるゝ如く、全體沙山であつて、佛洞は砂岩の壁に堀穿せられたものであるから、自然に埋没し易い譯で、徐松の書いて居る所によつても、その頃沙の爲に壓せられて傾圮せるもの多かつたことを知り得られる。現在に於ても同様であつて、かの書窟を有した洞の如きも、王という道士の力によつて、埋めて居つた沙を取り除けて、再現するに至つたものである。しかしかく廢滅した洞の少くないのは、必ずしも自然の力ばかりでは無く、古來屢々此の地方に起つた戰亂の爲によることも多かつたのである。殊にまた回教徒の如きが、宗教的の立場から、態々之を破壞したことも少くなかつたやうで、敦煌縣志卷七にも、雷音寺の條に「明時回人蹂躪、佛像屢遭毀壞、龕亦爲沙所掩」とも記されてゐる。